

第二部：調査結果の詳細

第一章 調査の目的

21世紀を間近に控えて、われわれの社会は情報化・国際化の大きなうねりの中で様々な根本的かつ急激な変動の波にさらされている。そこに生きるわれわれ、とりわけ次世代を担う若者たちには、この激動に適応しつつ、かつ時代を自ら動かしていく積極的な活躍が期待されている。

そのような若者たちの教育の場としての高等学校も、学習指導要領の改訂を踏まえ、教育課程や内容の改善のみならず、新しいタイプの高校の創設などのダイナミックな変化の中にある。折からの生徒数の減少も加わり、生徒一人一人の個性に対応した、行き届いた教育が求められている。

このような状況の中で、高校生たちがどのような意識を持ち、どのような生活実態の中にあるかについて、具体的で新しい、信頼性の高い資料を得ることは、高校教育において、またとりわけ「人間としての在り方生き方」に関する教育の中核に位置するとも言える「公民科」教育において、重要である。

全国高等学校公民科「倫理」「現代社会」研究会（略称：全倫研）では、昭和62年度以来、全国の高校生を対象として3回の調査を行ってきたが、第2回（平成2年度）・第3回（平成4年度）の調査では、「自己評価と高校生の意識と生活」についての全国調査を実施してきた。そこではローゼンバーグの自己評価尺度を用いて、家族・友人・学校生活についての意識との関連を分析し、自己評価尺度が高校生の生活と相関する一元的な説明尺度として、一定の有効性を持つことが確かめられた。しかし、高校生の多様な価値観を、多角的に分析するには、新しい説明尺度が必要であり、このことは課題として引き継がれた。

そこで、今回の調査においては、従来用いてきた自己評価尺度に代わるものとして、新たに高校生の実際の生活に即した、具体的かつ直観的に分かりやすく、多元的な説明尺度を開発して、より応用性に富んだ意識調査・分析を実施することを目的とした。さらに、社会問題への意識や授業方法・内容に関する設問を充実させることによって、公民科教育の発展に直接役立てることができるよう配慮した。

第二章 調査の方法

(1) 質問紙の作成

「高校生にとって大切なこととその達成度」に関する質問項目25、「家族・友人・学校生活・社会問題・公民科教育に関する意識調査」項目27の、合計52項目からなる質問紙（多肢選択式・マークカード使用）を用意した。

「高校生にとって大切なこととその達成度」に関する質問項目は、高校生の価値観を多元的にとらえるために、高校生の発達段階において直面するさまざまなことの「大切さ」の認識の程度と、その「達成度」を、それぞれ4件法の順序尺度、達成・未達成の名義尺度で答えさせるものである。これをクロス表による分析、因子分析等によって解析し、高校生の価値観を探り、かつ生活意識の分析のための説明尺度の作成を試みる。

「家族・友人・学校・社会問題・公民科教育に関する意識調査」は、過去に実施してきた全倫研全国調査との連続性をある程度考慮したが、公的機関が実施した新しい各種意識調査等も参考にして、質問項目や回答の選択肢を吟味した。これによって過去の調査と単純に比較できない部分も生じるが、時代の変化に対応し、かつ今後の調査にもできる限り長く使用に耐えることを優先して、敢えて改訂した。

これらの質問項目は、全倫研全国調査委員会、全倫研常任理事会における審議を経て作成され、

さらに都内の高校生306名を対象に予備調査を実施、その分析結果の検討を経て完成された。

(2) 調査時期

1994年12月～1995年2月

(3) 調査対象

主に全倫研を通じて依頼した全国の調査協力校52校（別記）の高校1～3年生

(4) 回収状況

有効回答数9648名

- ・男女別：男子4278名、女子5370名
- ・学年別：1 学年4740名、2 学年2789名、3 学年2119名
- ・課程別：全日制9600名、定時制48名
- ・学科別：普通科8605名（国際科・理数科含む）、工業科740名、その他303名

(5) 集計と分析

回収されたマークカードは、読み取り前後2回点検、フェイスシートの不完全なもの、明らかに不適当な記入がなされているもの（直線型、ジグザグ型など）は排除した。一方、読み取り不能のカード（ボールペン記入等）は手入力した。報告書に記載されているすべての集計において、項目ごとの無回答・無効を含めた全回答数は、上記9648名である。

点検後のデータは、統計アプリケーションに読み込み、集計・分析を実施した。分析は男女別・学年別の違いに重点をおいた。当初は学科やカリキュラムの違いによる分析も計画していたが、統計的に意味のある分析が可能な抽出にならなかったため、断念した。

【別記】：調査協力校（協力者）一覧

【北海道】大麻（朝川淳一）、野幌（高悦夫）、札幌厚別（矢倉芳則）、【青森】青森（明石裕）、五所川原（田中誠）、【岩手】盛岡南（高橋隆）、【宮城】名取北（鈴木敏雄）、【秋田】秋田北（中村薫）、【福島】郡山女子大附属（大塚啓一郎）、【茨城】磯原（西野正志）、大田第一（高梨保彦）、多賀（野内俊明）、水戸工業（立原健甫）、【栃木】宇都宮女子（福富俊治）、足利工業（島田豊）、【群馬】高崎（斎藤和義）、【埼玉】八潮（谷田道治）、鴻巣女子（竹内義晴）、浦和東（諏訪義久）、【千葉】市立松戸（山田幹夫）、県立船橋（石川久博、三澤信吾）、【東京】小石川（多田統一）、穎明館（橋本好広）、北野（廣末修）、久留米西（平井啓）、千歳（増淵達夫）、田園調布（佐良土茂・江方正子）、豊多摩（西川一臣）、小川（成瀬功）、日本大学第二（小笠原悦郎）、共立女子（館入慧子）、目白学園（金広茂昭）、玉川（山本正）、大泉学園（水谷禎憲）、【神奈川】藤沢商業（中山康夫）、横浜雙葉（斉藤邦彦）、【新潟】柿崎（桐原雅史）、【富山】富山女子（高木哲也）、【石川】金沢西（西野正洋）、【山梨】甲府東（宮川尚巳）、【愛知】知立東（土利かおる）、三好（上利達也）、市立菊里（長尾達也）、【三重】四日市南（平野義人）、【大阪】箕面東（西谷英昭）、【兵庫】神戸国際（小泉博明）、【奈良】畝傍（田中雅英）、【広島】広島工業大学附属（大森玄一）、【山口】山口（又野郁雄）、【高知】高知丸の内（寺尾隆二）、【福岡】博多工業（河村敬一）、【宮崎】都城泉ヶ丘（園田義治）
（順不同、敬称略、所属は調査当時）

第三章 調査結果

1. 「高校生にとって大切なこと」とその達成度（設問1～25）

設問1～25は、高校生が自分にとって大切なことであると認識するであろうことから25の項目を選び、その「大切さ」の認識の程度を4段階で評価、さらにそのことがらを達成または経験し

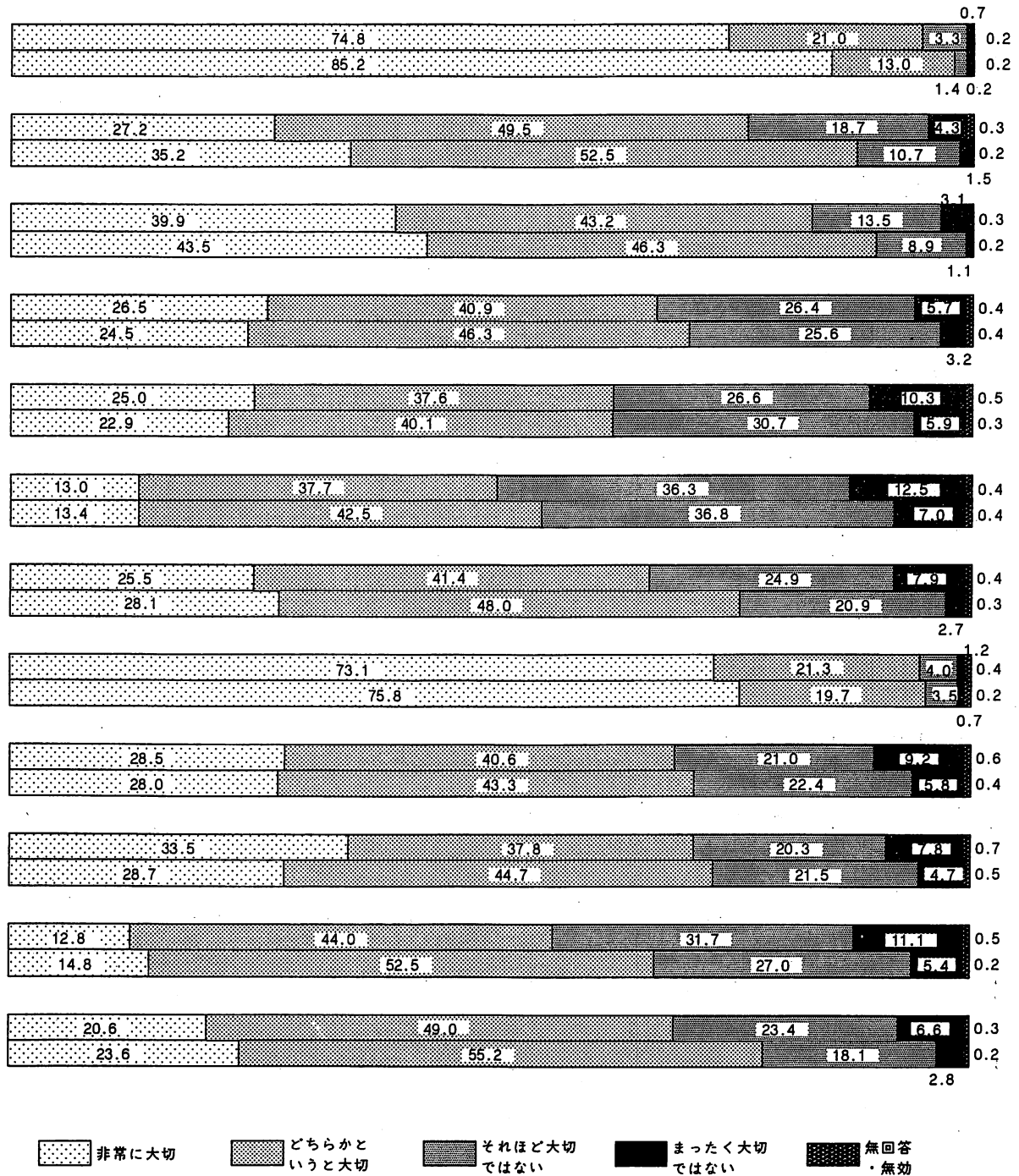
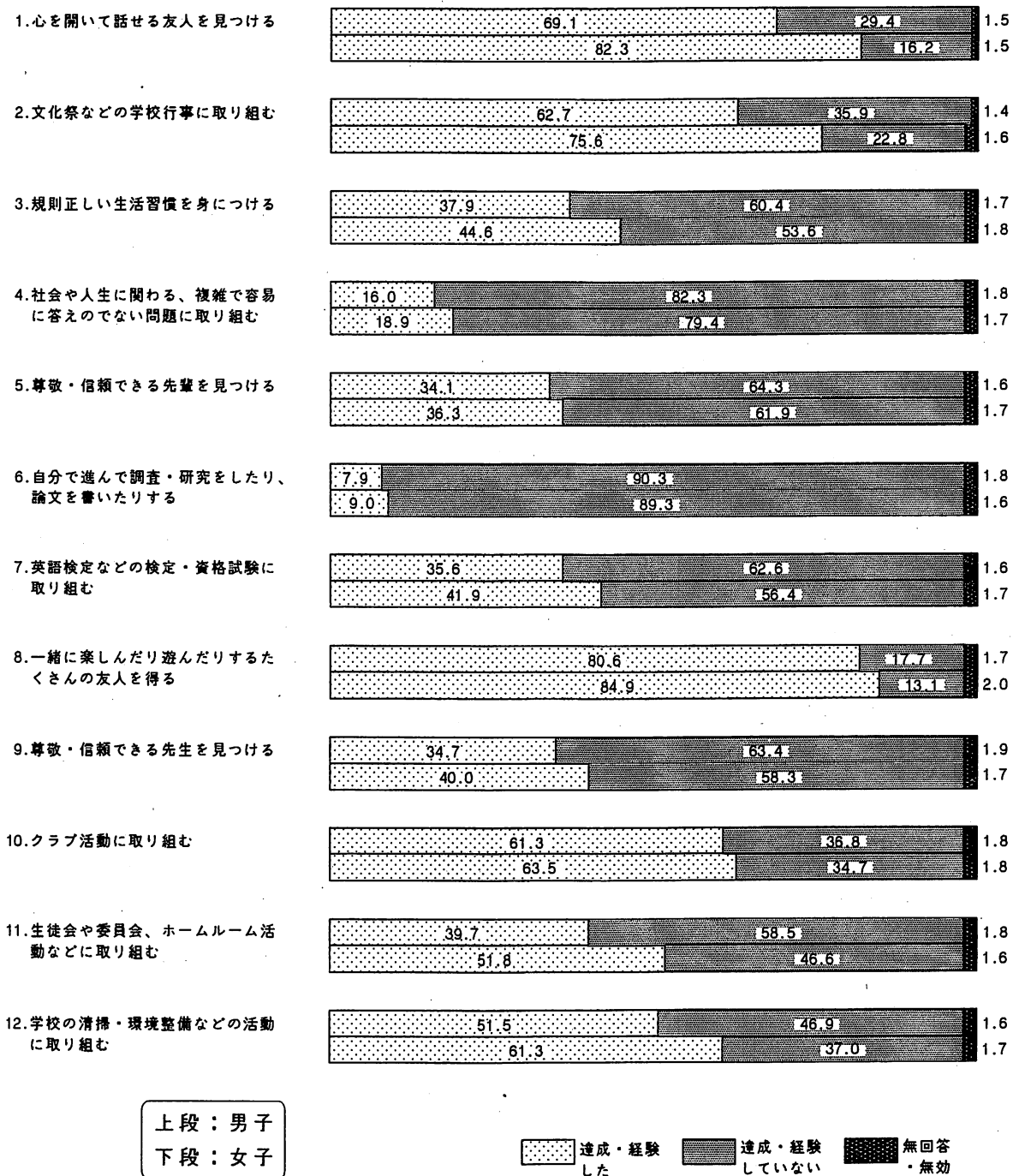


図 3-1-(1) 「大切なこと」と

たと認識しているかについて(「達成度」)質問している。「大切さ」については、後にこれを因子分析することによって、高校生のいわゆる「価値観」の特徴をつかみ、かつ生活意識を探るための説明尺度の作成を試みようとするものである。また、「大切さ」と「達成度」との相関を見ることによって、価値認識と現実認識との協和・不協和について、考察しようとするものである。

これらについての単純集計結果が、図2-1(1)および(2)である。左ページが「大切さ」、右ページが「達成度」のグラフである。



「達成度」(1) (設問 1 - 12)

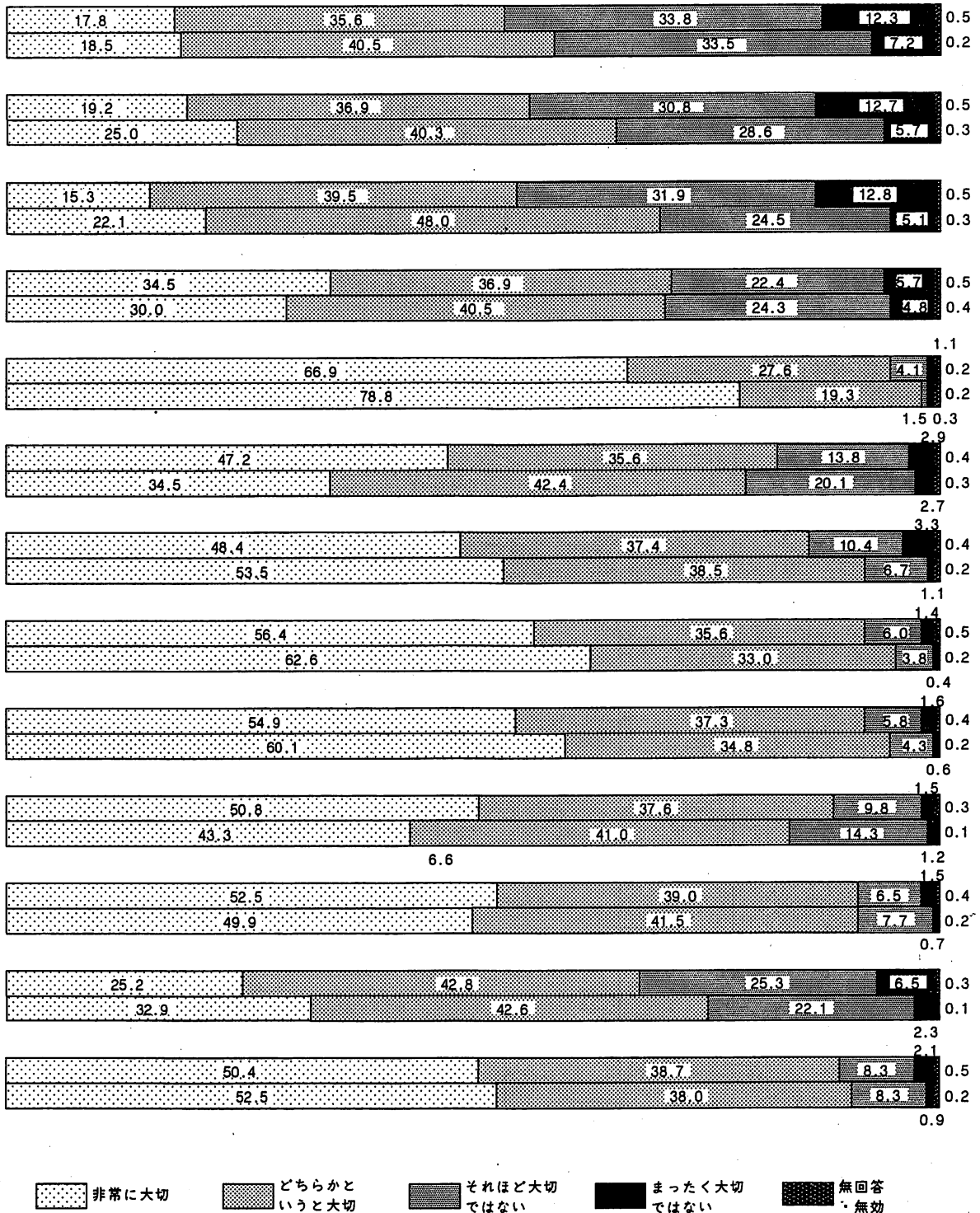
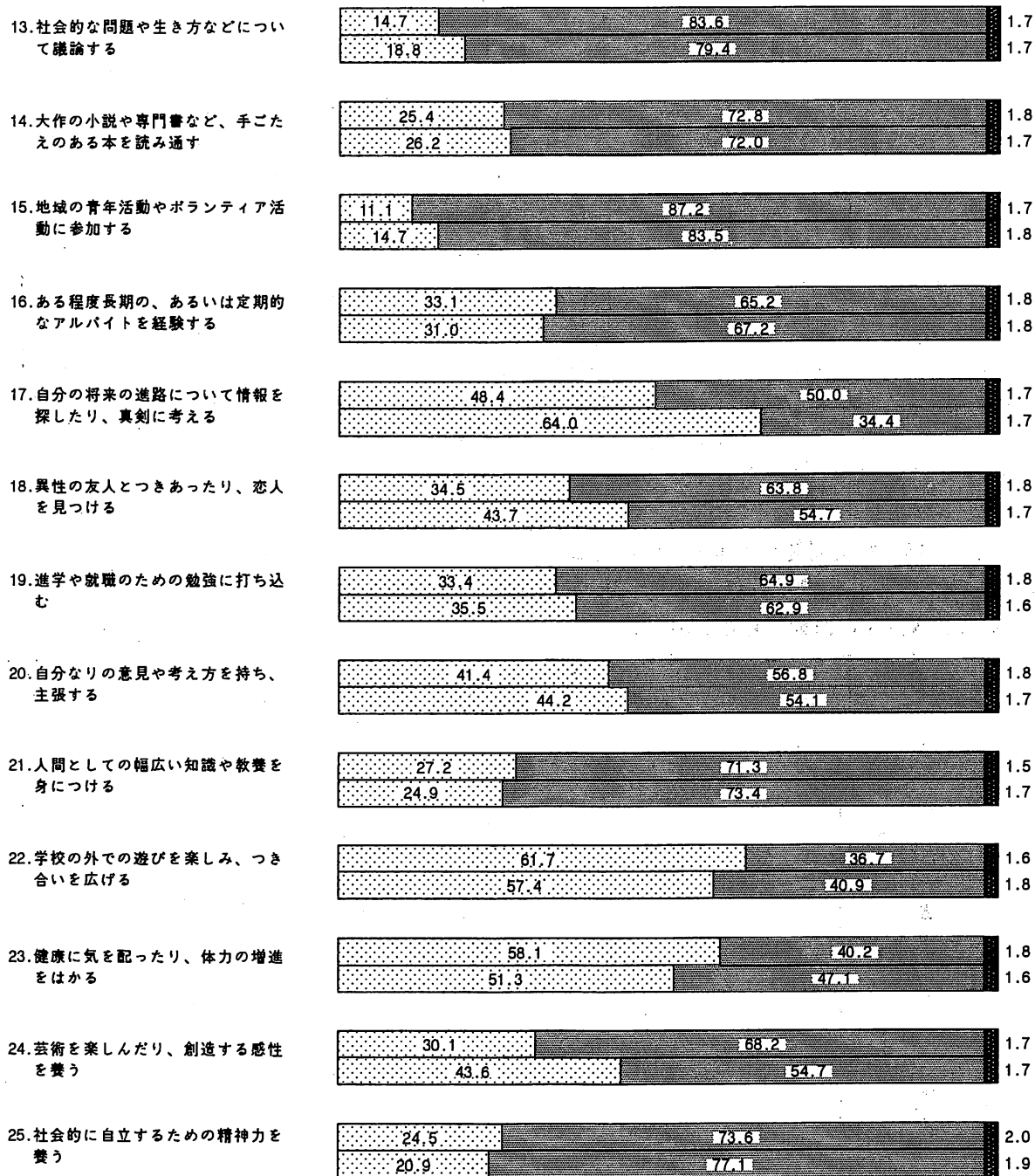


図 3-1-(2) 「大切なこと」と

この結果を見ると、友人関係についての項目（設問1,8）については、「大切さ」・「達成度」ともにきわめて高く、反面人間・社会などの探求にかかわる項目（設問6,13,16など）については、ともに低い、という傾向が見られる。

一方、「大切さ」は高いが「達成度」は低い項目（設問21,25など）、逆に「大切さ」は低いが「達



上段：男子
下段：女子

達成・経験した 達成・経験していない 無回答・無効

「達成度」(2) (設問 13 - 25)

成度」は高い項目(設問10, 11, 12など)もある。

なお、「大切さ」にくらべて「達成度」の無回答が多いのは、各設問についてこの両方を答える旨の指示を読み落とした者があったためと思われる。

ところで、もともとこれらの設問は、高校生にとって多かれ少なかれ大切に思われるであろう項目によって構成されているので、回答は全般的に「大切」に傾きやすい。そこで、「どちらかという
と大切」を含めて見るのではなく、「非常に大切」を選んだ割合のみを取り上げて見ることによって、
項目間の異同を直観的に捉えようとしたものが図2-2である。ここでは男女全体の回答について、X
軸に「非常に大切」と答えた者の割合を、Y軸に「達成・経験した」と答えた者の割合を取り、設
問番号をプロットした。

図2-2に示される限り、多くの設問はX=Yの直線付近に分布しており、「大切さ」と「達成度」
の間の相関をうかがわせる結果となった（この傾向については、相関係数やクロス表による検定の
結果でも確認した）。

このX=Yの直線付近で、「大切さ」・「達成度」とも高いのが、友人関係に関する項目である
1（心を開いて話せる友人）・8（いっしょに楽しむ多くの友人）である。もともとこれらは「非常
に大切」・「どちらかという大切」を合わせると90%を越えており、また達成度も設問1の男子
で7割、その他で8割を越える。

一方、「大切さ」・「達成度」とも低いのが、4（社会や人生に関する問題）・6（調査研究や
論文作成）・13（社会問題や生き方について議論）・14（小説や専門書を読む）・15（地域活動や
ボランティア）等、社会問題への関心・意欲や世界観・人生観にかかわりの深い項目である。

つづいて、X=Yの直線から遠い項目を拾い上げてみる。これらには、「大切さ」の認識と「達成
度」との不一致があるということになる。

「大切さ」は高いが「達成度」が低いのは17（進路についての情報収集と検討）・19（進学や就

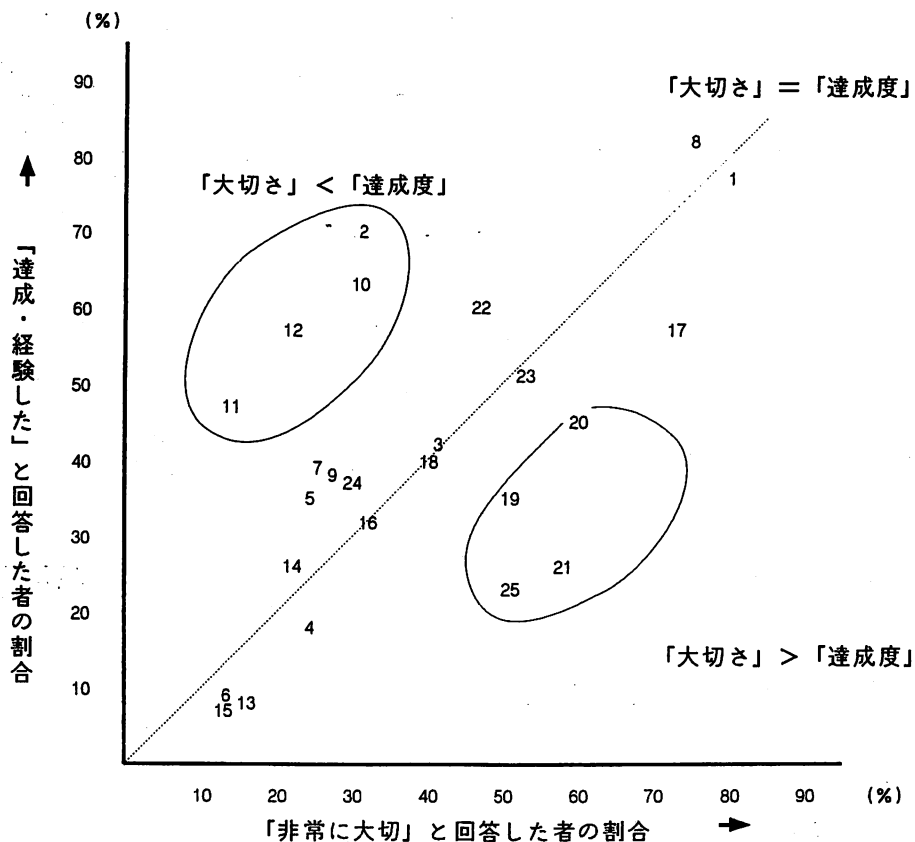


図 3-2 「非常に大切」なことと「達成度」との関係

職のための勉強)・21(人間としての幅広い知識や教養)・25(社会的に自立するための精神力)等である。高校生にとって差し迫った問題であると考えられる、進路や社会的自立に関する項目である。

逆に「達成度」は高いが「大切さ」は低いのは、2(文化祭などの学校行事)・10(クラブ活動)・11(生徒会、委員会、ホームルーム活動)・12(学校の清掃、環境整備)等である。主に学校が提供する課外活動の類に関する項目である。

このプロットをもとに、直観的理解のために単純化した概念図が図2-3である。

なお、「大切さ」に関する因子分析等による詳細な分析は、第四章で試みられている。

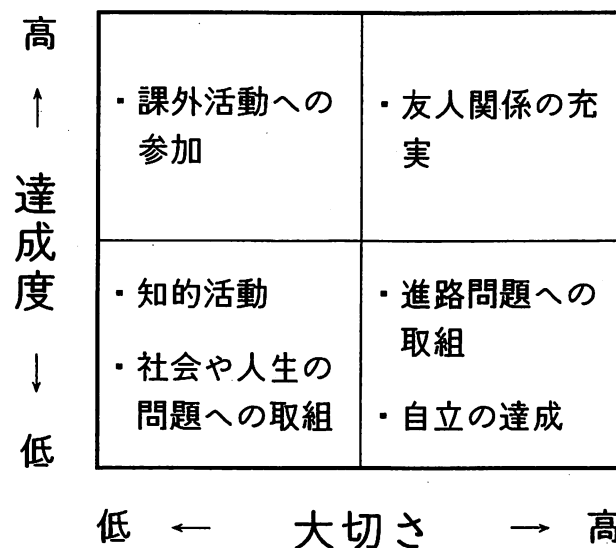


図 3-3 「大切さ」と「達成度」

最後に、男女別で見ると、ほとんどの項目にわたって、女子の方が「大切さ」・「達成度」ともに肯定的で、男子の方が統計的にも「大切さ」が優位^{**)}なのは設問・18(異性の友人・恋人)・22(学校外での遊び・つき合い)、「達成度」が優位なのは22(学校外での遊び・つき合い)・23(健康・体力増進)・25(社会的に自立するための精神力)だけである。

註*) : 本報告書の作成に当たっては、クロス表による検定(カイ自乗、ケンドールのタウ、他)の他、男女差にはマン・ホイットニー検定、学年差にはクラスカル・ウォリス検定を行なうなどして、分析を進めた。本報告書ではその詳細は割愛したが、差を認めている記述は、項目数・ケース数が多いため、これらの検定の結果概ね0.01%未満の危険率であることを示している。

2. 高校生の生活～家族・学校・友人（設問26～40）

高校生の生活意識にはどのような傾向が見られるだろうか。この傾向を見るために、高校生の生活の中心の場である家族生活と学校生活について、および友人関係について、質問した。前節の「高校生にとって大切なこととその達成度」にも高校生の生活意識に関する項目があるので、比較してみることもできる。

(1) 家族

①家族生活満足度（設問26）

家族生活への満足度を4段階に分けて質問したところ、「どちらかといえば満足している」（38.2%）、「満足している」（38.1%）がほぼ同じ割合で、両者をあわせて満足群とすると、76.3%となり、全体の四分之三を占める。

男女差を見ると、「満足している」が男子34.3%、女子41.2%で、女子の方が多い。

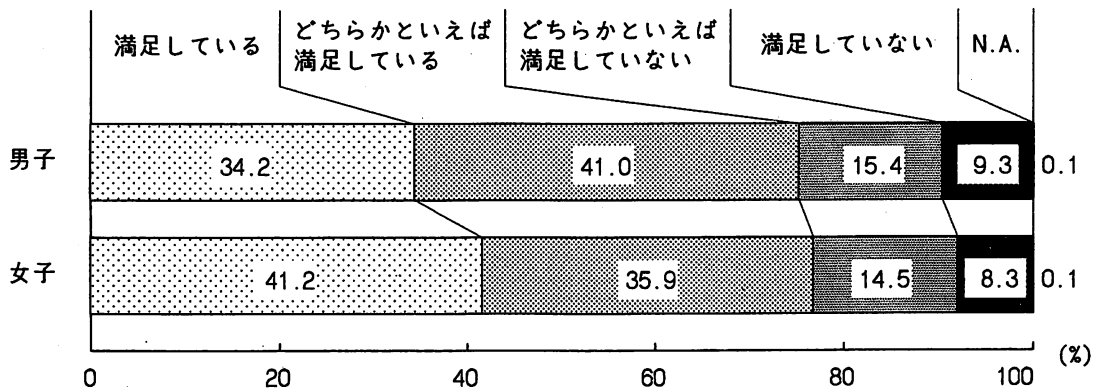


図 3-4 あなたは、家族との生活に満足していますか。（設問 26）

②親・保護者との理解度（設問27）

親・保護者との互いの理解度を4段階に分けて質問したところ、「どちらかといえばそう思う」（44.0%）が最も多く、「そう思う」（24.8%）がこれに次いでいる。この両者をあわせて相互理解肯定群とすると、68.8%となり全体の7割となる。

男女差を見ると、「そう思う」が男子21.7%、女子27.6%で、女子の方が多い。

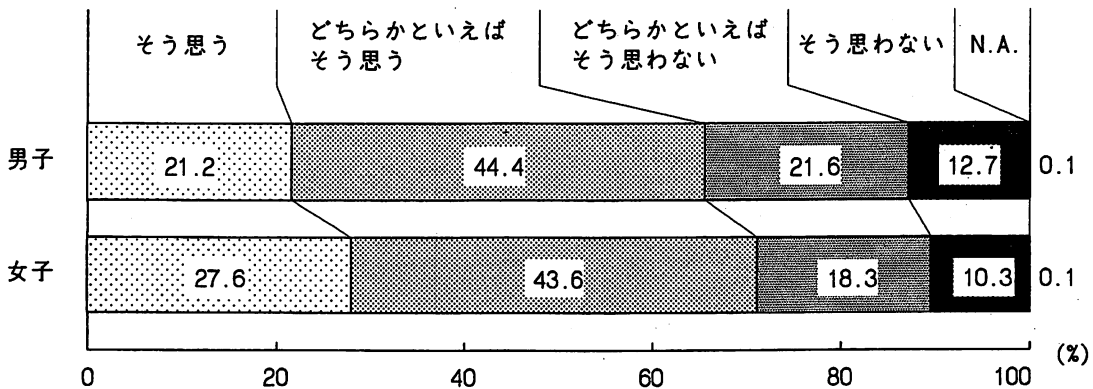


図 3-5 あなたは、親・保護者と理解し合えていると思いますか。（設問 27）

③親・保護者との意見の対立（設問28）

親・保護者との意見の対立について複数回答式で質問したところ、「無回答（対立はない）」(42.1

%)が最も多かった。意見の対立があるという者の中では、「勉強や進路」(28.1%)が多く、「生活態度」(18.6%)が続いている。

男女別に差のある項目は、「バイクや自動車」(男子11.6%、女子3.6%)で男子が多く、「生活態度」(男子11.6%、女子16.7%)、「服装・頭髪や持ち物」(男子6.2%、女子11.1%)で女子が多い。

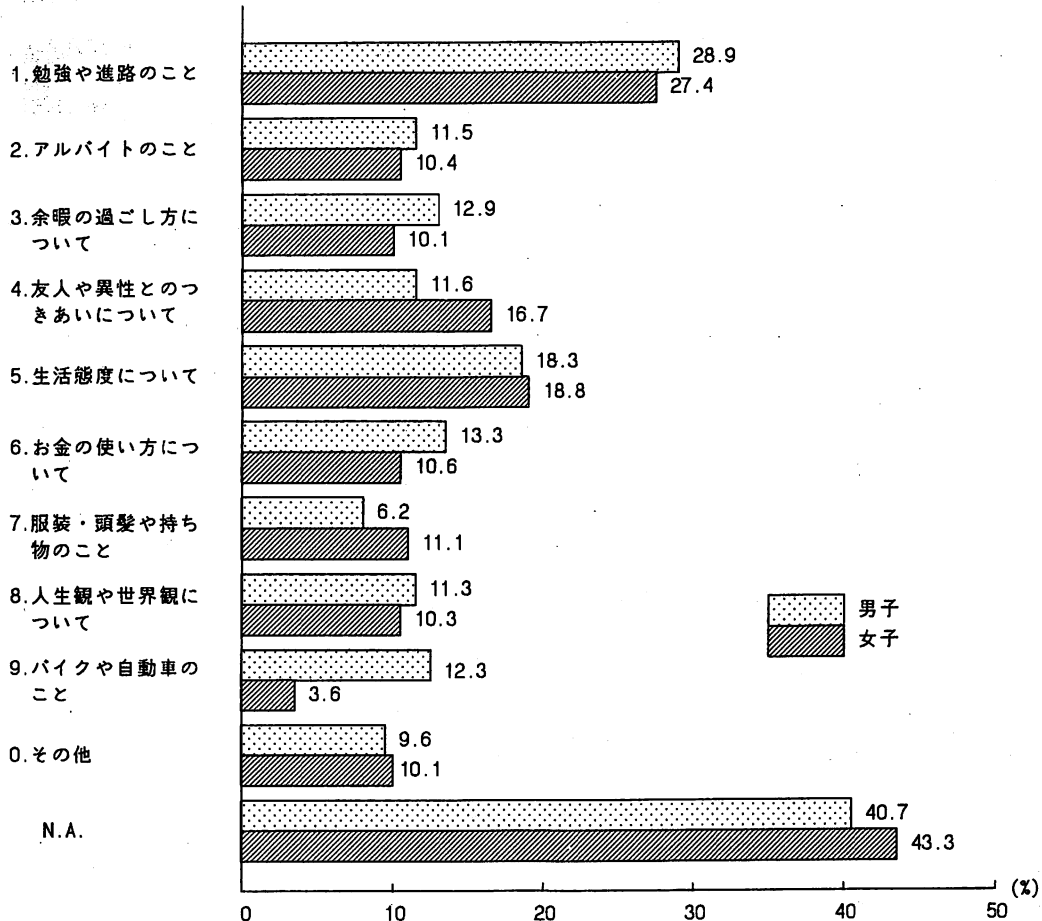


図 3-6 あなたは、ここ2～3年の間に、次にあげる問題について、親・保護者との間でとても歩み寄れないと思うほどの意見の対立をみたことがありますか。(いくつかでも、なければマークしない) (設問 28)

④親・保護者からの信頼度 (設問29)

高校生になってから、親が信頼して責任を持たせてくれるようになったかを、4段階に分けて質問したところ、「どちらかといえばそう思う」(43.6%)が最も多く、「そう思う」(24.8%)がこれに次いでいる。この両者をあわせて被信頼群とすると、全体の約7割(68.4%)となった。

男女別に差のある項目は、特に見られなかった。学年別では、被信頼群が、学年が進行するにつれて多くなっている(1学年65.2%、2学年69.5%、3学年73.1%)。

⑤幼児期の家庭の雰囲気 (設問30)

小さかった頃の家庭の雰囲気の暖かさを4段階に分けて質問したところ、「そう思う」(54.6%)が最も多く、「どちらかといえばそう思う」(31.2%)がこれに続いている。この両者をあわせて暖群とすると、85.9%となる。

男女別の差のある項目は、特に見られなかった。

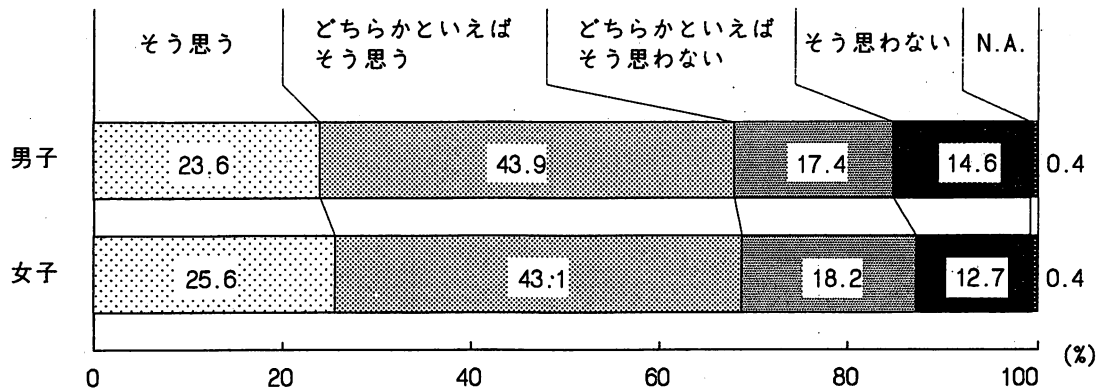


図 3-7 あなたの親・保護者は、あなたが「高校生」になってから、あなたを信頼して責任を持たせてくれるようになったと思いますか。（設問 29）

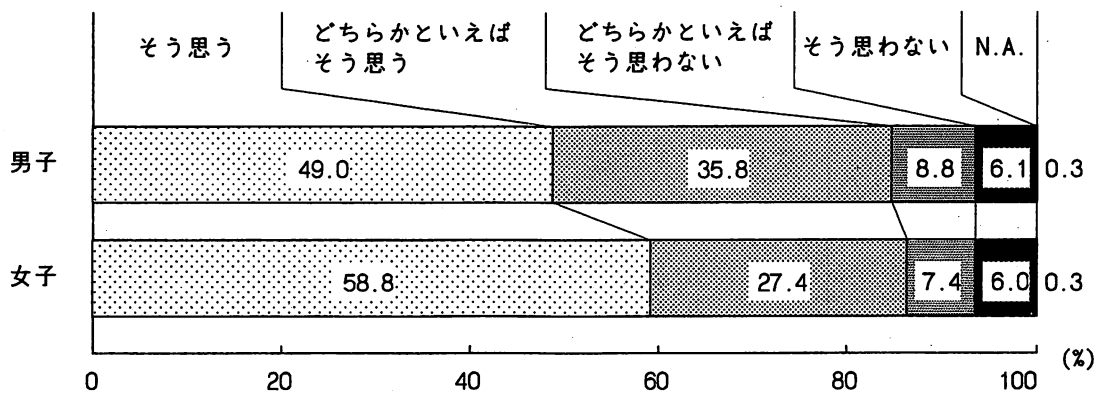


図 3-8 あなたが小さかった頃、あなたの家庭の雰囲気は暖かかったと思いますか。（設問 30）

⑥精神的「親離れ」度（設問31）

精神的に「親離れ」しているかどうかを、4段階に分けて質問してみたところ、「どちらかといえばそう思う」（40.8%）が最も多く、「そう思う」（26.6%）がこれに次いでいる。この両者をあわせて精神的自立群とすると、67.4%と約7割を占めている。

男女別に見ると、精神的自立群は、男子の方が女子に比べて多く（男子75.7%、女子60.4%）、「どちらかといえばそう思わない」「そう思わない」の両者をあわせて精神的依存群とすると、女子の方が男子に比べて多い（男子24.0%、女子39.3%）。

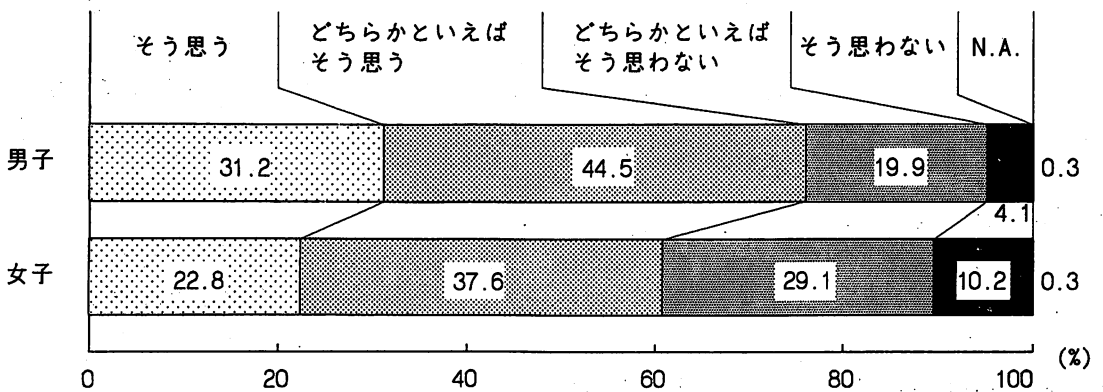


図 3-9 あなたは、精神的に「親離れ」をしていますか。（設問 31）

⑦「大人」認識（設問32）

自分が一人前の大人となったと思える時期について質問したところ、「就職して経済的に自立」（46.2%）が最も多く、これに次いで「家族から独立して暮らす」（12.9%）、「高校を卒業したとき」（11.3%）が多い。

男女別に差のある項目は、特に見られなかった。

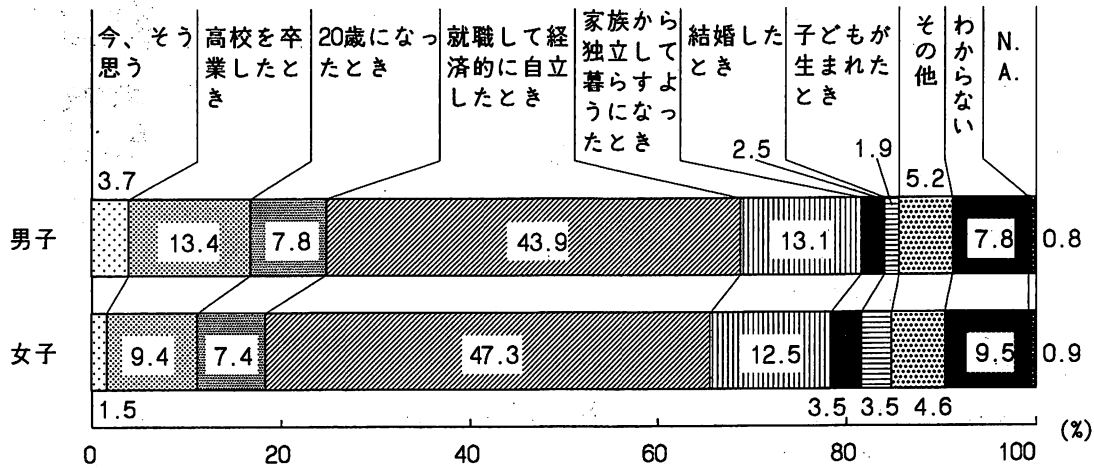


図 3-10 あなたは、自分が一人前の大人になったと思えるのはいつ頃だと思いますか。（設問 32）

(2) 学校・友人

①学校生活満足度（設問33）

学校生活の満足度を4段階に分けて質問したところ、「どちらかといえば満足している」（40.3%）が最も多く、「どちらかといえば不満である」（24.8%）がこれに次いでいる。「満足している」と「どちらかといえば満足している」の両者をあわせて満足群とすると、57.6%と過半数を若干越えている。

男女別に見てみると、満足群は、女子の方が男子に比べて多い（男子52.1%、女子61.5%）。

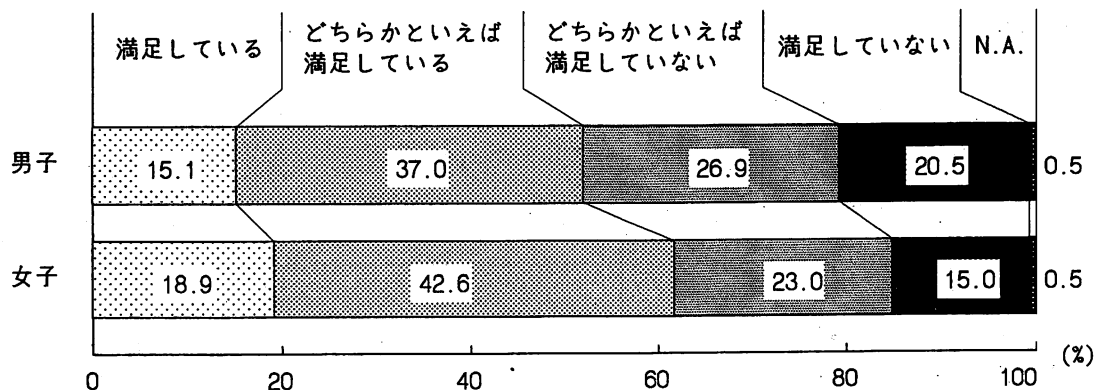


図 3-11 あなたは、学校生活に満足していますか。（設問 33）

②在籍校の希望入学度（設問34）

在籍している学校は希望して入学したのかどうかを、4段階に分けて質問したところ、「希望していた」（50.9%）が最も多く、「どちらかといえば希望していた」（27.4%）がこれに次いでいる。両

者をあわせて希望入学群とすると、78.3%となっている。

男女差は、特に見られなかった。

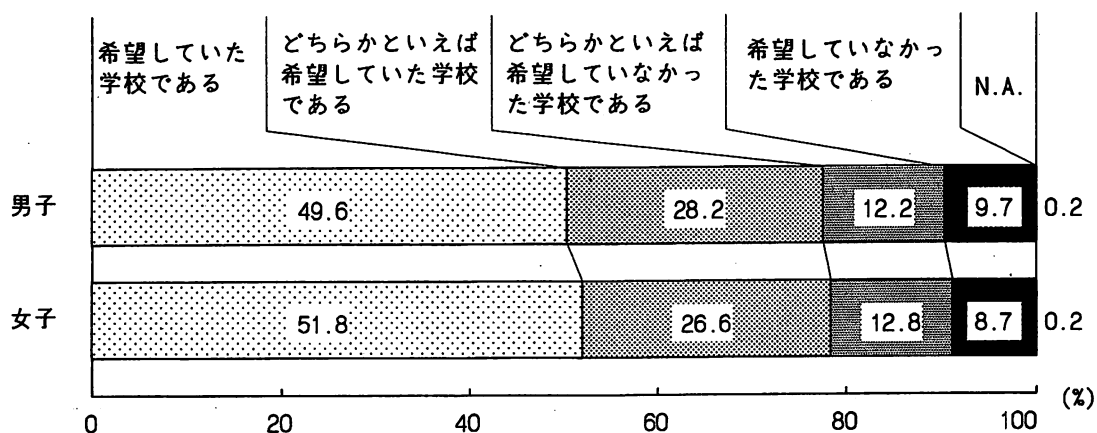


図 3-12 あなたが在籍している学校は、あなたが入学を希望していた学校ですか。(設問 34)

③授業理解度 (設問35)

学校の授業についていけるかどうかを、4段階に分けて質問したところ、「だいたいの教科についていける」(66.7%)が最も多く、「多くの教科についていけない」(20.0%)がこれに次いでいる。

男女差は、特に見られなかった。

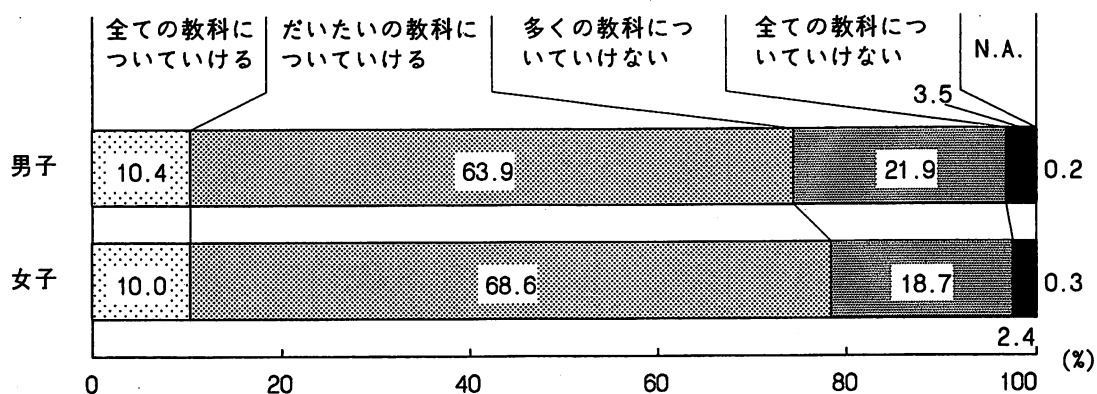


図 3-13 あなたは、学校の授業についていけますか。(設問 35)

④卒業後の進路 (設問36)

希望する卒業後の進路について質問したところ、「四年制大学」(53.0%)が最も多く、「専修・専門学校」(14.1%)、「就職」(12.8%)がこれに続いている。

男女別に見ると、「短期大学」に女子が多く(男子1.4%、女子16.6%)、「四年制大学」は男子の方が多(男子60.2%、女子46.7%)。

⑤友人関係満足度 (設問37)

友人との関係の満足度を4段階に分けて質問したところ、「満足している」(42.2%)が最も多く、「どちらかといえば満足している」(41.9%)がこれに次いでいる。両者をあわせて友人関係満足群とすると、84.1%になる。

男女差は特に見られない。

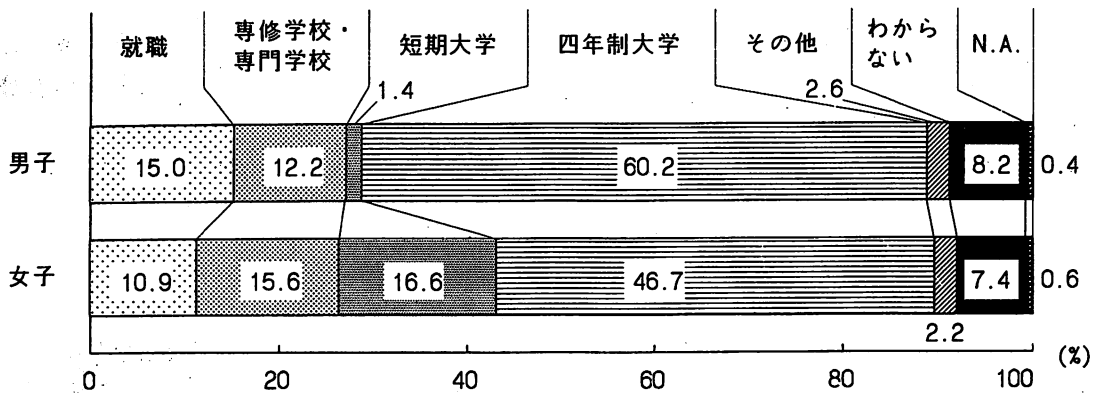


図 3-14 あなたの希望する卒業後の進路は、次のどれですか。（設問 36）

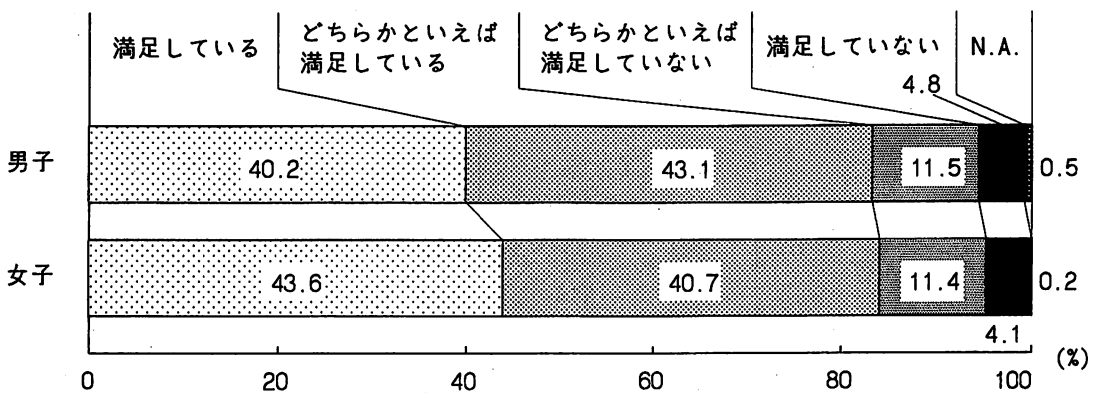


図 3-15 あなたは、友人との関係に満足していますか。（設問 37）

⑥ 高校教育における指導についての期待（設問38）

高校教育における指導として最も期待するものを質問したところ、「知識や教養」（32.6%）、「進路（進学・就職）」（32.5%）、「人格形成」（31.3%）の順にほぼ同じ割合となった。「基本的な生活習慣」（3.6%）は少なかった。

男女差は特に見られなかった。

学年別に見ると、「人格形成」は1年生より3年生が多い（1年29.2%、3年35.8%）。

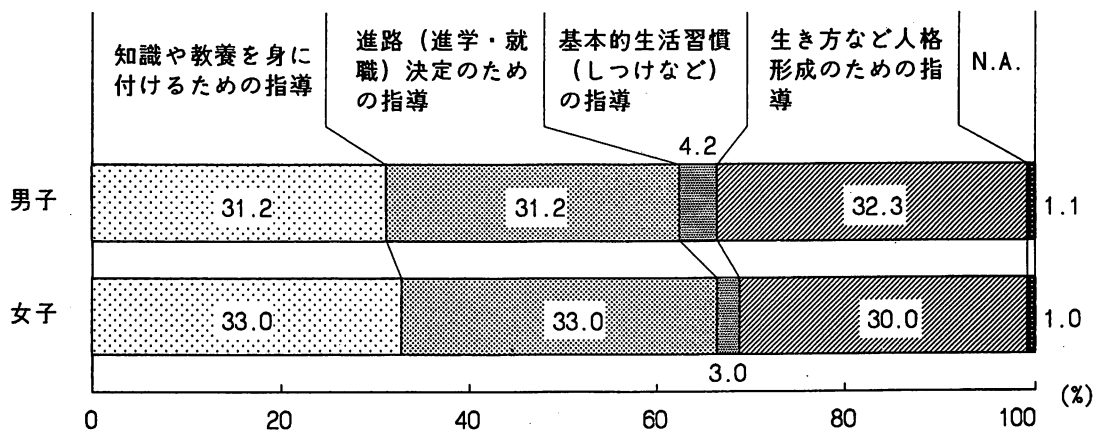


図 3-16 あなたは、高校教育における指導として、次のうちのどれにもっとも期待していますか。（設問 38）

⑦通学義務感（設問39）

毎日学校に通うべきかを4段階に分けて質問したところ、「そう思う」（46.5%）が最も多く、「どちらかといえばそう思う」（31.8%）がこれに次いでいる。この両者をあわせて通学義務感所有群とすると、78.3%と全体の約8割となった。

男女別に見ると、「そう思わない」で男子の方が多い（男子13.0%、女子7.8%）。

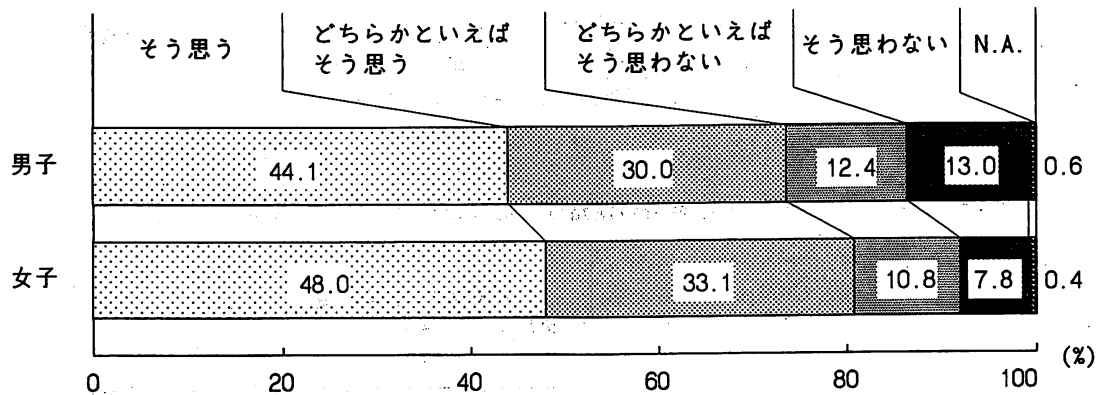


図 3-17 あなたは、「学校は毎日きちんと通うべきだ」と思いますか。（設問 39）

⑧生き方・ものごとの見方で考えさせられた場面（設問40）

学校生活で生き方やものごとの見方で考えさせられた場面について質問したところ、「友人関係」（60.4%）が最も多く、「クラブ活動」（26.3%）がこれに次いでいる。

男女別に差のある項目を見ると、「友人関係」は女子の方が多い（男子50.0%、女子68.6%）、「学校生活ではそのような経験がない」は男子の方が多い（男子19.1%、女子12.3%）。

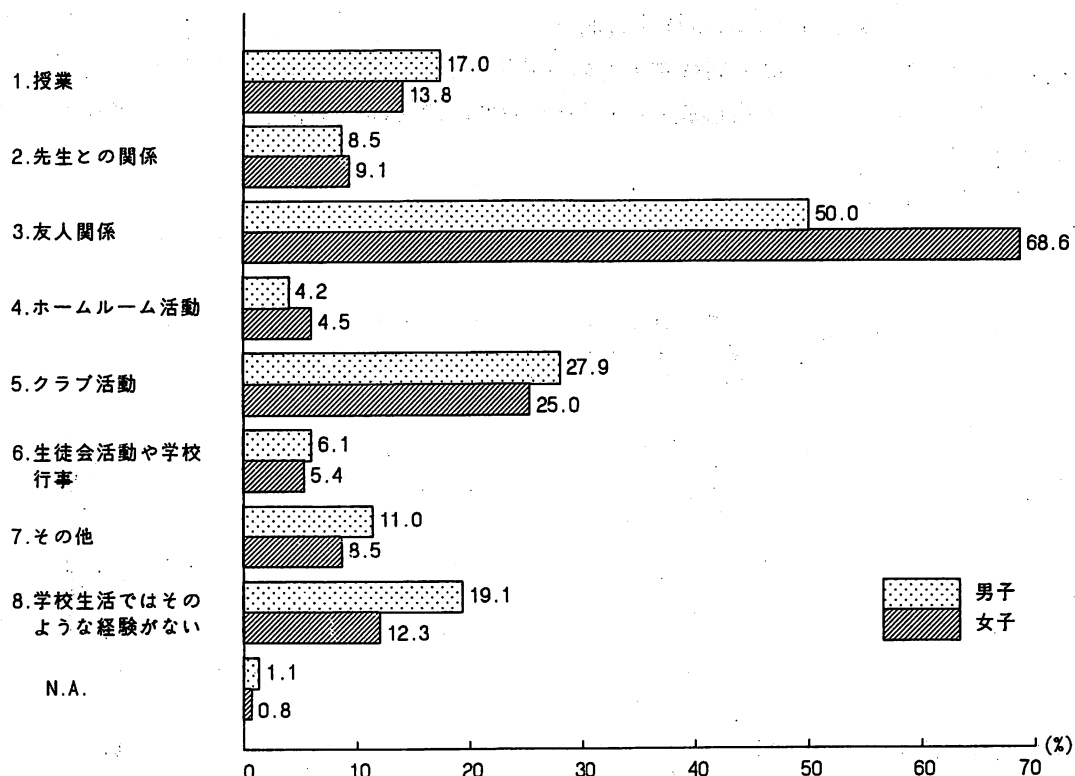


図 3-18 あなたは、学校生活のどのような場面で、自分の生き方や考え方、ものごとの見方などについて考えさせられましたか。（2つまで）（設問 40）